

カプノサイトファーガ・カニモルサス感染症とは

Q：カプノサイトファーガ・カニモルサス感染症とはどのようなものですか。

A：カプノサイトファーガ・カニモルサス感染症は動物由来感染症です。犬や猫に咬まれたり、引っ掻かれたりすることで感染・発症します。報告数は非常に少なく、人から人への感染の報告はありません。

【 動物由来感染症 】

「動物由来感染症」とは動物から人に感染する病気の総称です。人と動物に共通する感染症（Zoonosis：ズーノーシス）は、日本では、「人獣共通感染症」や「人と動物の共通感染症」とも言われますが、厚生労働省は人の健康問題という視点に立って、「動物由来感染症」という言葉を使っています。世界保健機関（WHO）では、ズーノーシスを「脊椎動物と人との間で自然に移行するすべての病気または感染（野生動物等では病気にならない場合もある）」と定義しています。なお「動物由来感染症」には、人も動物も重症になるもの、動物は無症状で人が重症になるものなど病原体によって様々なものがあります。

【 カプノサイトファーガ・カニモルサス感染症とは 】

カプノサイトファーガ・カニモルサス（*Capnocytophaga canimorsus*）という細菌を原因とする感染症です。この細菌は犬や猫などの口の中に存在しており、犬や猫に咬まれたり、引っ掻かれたりすることで感染・発症します。免疫機能の低下した方において重症化する傾向があります。

なお、動物による咬傷事故等の発生数（※）に対し、報告されている患者数は非常に少ないことから、本病は極めて稀にしか発症しないと考えられます。人から人への感染の報告はありません。

菌の名前の、カニモルサス（*canimorsus*）は「犬による咬傷」を意味するラテン語（*canis* [犬] + *morsus* [咬傷]）に由来します。

（※犬の咬傷事故については、保健所に報告されたものだけでも年間約6千件もあり、報告に至らないものを含めるとさらに多く発生していると考えられます。）

【 症状 】

犬や猫に咬まれてから発病までの期間（潜伏期）は1－8日です。

症状は、発熱、倦怠感、腹痛、吐き気、頭痛などです。重症化した場合は、敗血症や髄膜炎を起こし、播種性血管内凝固症候群（DIC）や敗血性ショック、多臓器不全に進行して死に至ることがあります。

なお、重症化した場合、敗血症になった方の約30%が、髄膜炎になった方の約5%が亡くなるとされています。

【 日本での発生状況 】

日本においては、これまで重症化した患者の文献報告例が14例あります（2002～2009年）。

内容をみると、患者の年齢は40歳代～90歳代と中高年齢が多く、糖尿病、肝硬変、全身性自己免疫疾患、悪性腫瘍などの基礎疾患が見られます。

14例中6例が死亡しています。感染の原因としては、犬による咬傷6例、猫による咬傷・搔傷6例、不明2例となっています。

なお、近年の報告が多いのは、臨床現場で本病が認知されてきたためと思われます。

【 諸外国での発生状況 】

1976年に報告された敗血症・髄膜炎例が、最初の文献報告とされています。その後、現在までに世界中で約250人の患者が報告されています。敗血症の時の死亡率は、日本国内の患者では30%程度とされていますが、オランダでの近年の大規模患者調査では約12%でした。また、感染した場合の発症割合については、オランダの調査では100万人に0.7人、デンマークでは0.6人との報告もあります。

【 診断方法 】

患者血液や脳脊髄液、傷口の滲出液を培養して、菌を分離・同定します。培養サンプルからの遺伝子検出（PCR）も可能です。

しかし、医療機関を受診した時に敗血症の状態であることが多く、急激に悪化することがあり、また、生育が遅い菌のため培養検査では分離・同定の検査結果による診断には時間がかかることから、検査結果を待つことなく患者の臨床症状等に応じてできるだけ早期に適切な治療を開始する必要があります。

なお、血液培養が行える検査施設であれば、分離及びある程度の同定は可能です。

【 治療方法 】

カブノサイトファーガ・カニモルサス感染症が疑われる場合には、患者の臨床所見等に応じて早期に抗菌薬等による治療を開始することが重要となります。咬傷に対する抗菌薬としては、ペニシリン系、テトラサイクリン系抗菌薬が一般的に推奨されていますが、カブノサイトファーガ・カニモルサスには β -ラクタマーゼを産生する菌株もあるので、ペニシリン系の抗菌薬を用いる際には β -ラクタマーゼ阻害剤との合剤などその影響を受けにくいものを選択すると

よいとされています。

【 本感染症と診断した場合の行政機関への報告 】

カプノサイトファーガ・カニモルサス感染症は、感染症法の届出対象疾病ではありませんので、保健所等への届出は不要です。ただし、本菌の調査研究の進展のため、国立感染症研究所獣医科学部第一室が情報を求めているとのことです。情報提供にご協力をよろしくお願いいたします。

相談窓口としては、国立感染症研究所獣医科学部第一室（03-5285-1111 内線2622）にお問い合わせください。

【 感染しないために 】

一般的な動物由来感染症予防の対応と変わりありません。日頃から動物との過度のふれあいは避け、動物と触れあった後は手洗いなどを確実に実行しましょう。

本感染症では基礎疾患のない健常人であっても発症し、重症例では死亡例も報告されていますが、受傷時に早急に医療機関を受診して消毒や抗生物質の投与等を受けていれば重症化しなかった可能性もあります。

犬・猫による咬傷・搔傷であっても、早期に医療機関を受診するように啓発することが重要であると考えられます。

なお、脾臓摘出者、アルコール中毒、糖尿病などの慢性疾患、免疫異常疾患、悪性腫瘍にかかっている方、高齢者など、免疫機能が低下している方は、重症化しやすいと考えられますので特に注意してください。

犬や猫に咬まれて感染することがある微生物は、カプノサイトファーガ・カニモルサスだけではありません。パストレラ菌や黄色ブドウ球菌が多く、他にも、連鎖球菌、コリネバクテリウム、*Eikenella corrodens* など多数あります。破傷風や狂犬病の心配もあります。

なお、犬による咬傷事故が発生した場合、早急に最寄りの保健所に届け出るようになります。

【 参考文献 】

- (1) 厚労省HP C. canimorsus感染症に関するQ&A
- (2) 横浜市衛生研究所HP C. canimorsus感染症について
- (3) 大阪市役所HP C. canimorsus感染症にご注意ください
- (4) 国立感染症研究所感染症情報センター HP

「イヌ・ネコの咬傷感染によるC. canimorsus 敗血症の4症例」

- (5) 動物由来感染症ハンドブック2010 厚労省健康局結核感染症課

表 1. 国内患者の確認報告例（2002～2009年） 参考資料（1）参照

発生又は報告年	患者 (性別・年齢)	感染動物・経路	主な症状	予後
2002	女・90代	猫・咬傷	意識障害	死亡
2004	男・60代	猫・搔傷	敗血症	死亡
2004	男・40代	猫・咬傷	敗血症	回復
2006	女・70代	犬・咬傷	敗血症、DIC、多臓器不全、意識障害	回復
2006	男・60代	不明	敗血症、DIC	死亡
2007	女・70代	犬・咬傷	敗血症、髄膜炎、意識障害	回復
2007	女・50代	猫・搔傷	敗血症、嘔吐	死亡
2008	男・60代	犬・咬傷	敗血症、DIC、黄疸、多臓器不全	死亡
2008	男・50代	犬・咬傷	敗血症、DIC	回復
2008	男・40代	犬・咬傷	敗血症、DIC	回復
2008	男・70代	犬・咬傷	発熱、創部発赤	回復
2008	男・70代	猫・搔傷	敗血症	死亡
2008	男・70代	猫・搔傷	敗血症、DIC	回復
2009	女・50代	不明（犬）	電撃性紫斑、四肢末梢壊死	回復